

それゆえすべて等位にある。そしてそれらは同時にすべて差異的であり、さらに互いに密接に関連しあっている」というタウヒードの論理にきわめて近いと指摘する（黒田壽朗『イスラームの構造——タウヒード・シャーリア・ウンマ』書肆心水、2004年、23頁）。

意見

宮本 久雄

今回御三人の提題者はいずれも「中世から近世へ」というパラダイム変換の時代にあって、多様多元的な共同体・国家の共存という共通の問いを、さらに現代に及ぶ射程をもって問い提題されたことが印象的であった。

藤田氏は、政治思想的視点から、中世の存在論における *esse* が *existere* と理解されて以来「存在忘却」が始まり、*existere* が単独者たる主体の *Existenz* 化したと語る。その典型がキルケゴールの実存の主体性（「主体性が真理である」）に結晶化し、こうして歴史的諸連関が排された「瞬間」の実存の主体性は「神の手に高められた自由」を獲得し、他者一切を無視するナチスの全体主義の誕生の要因となったと言う。それゆえ中世的存在論に立返り、存在論の次元の根源的共通性と活動的な政治的生および倫理的共存との関係を考察し続けなければならない。大略以上のような氏の立論に対し評者は中世的 *ontologia* よりさらにヘブライ的存在 (*hāyāh*) のもつ可能性について問うた。その問いに対し氏は *hāyāh* 的な *dābār*（ヘブライ的言即事）に言及された。

それは全体主義（奴隷・捕囚）から共存（解放・救済）への中間時に生きるわれわれが、カント的自律性に拠るよりもむしろ自己の悪を自覚しつつ言葉（ダーバール）・テキスト（例えば「出エジプト記」）を解釈し弱き者として協働しつつ倫理的の共同体および政治をその都度形成してゆく継続的応答を意味する。その政治的共同体が、再びイスラエル民族がカナーン占有で陥ったような全体主義に陥らないためには、常に脱自的存在 (*hāyāh*) に拠らなければなるまい。その意味で中世哲学会も解釈共同体として発提・議論し続けるのであろう。

柴田氏は、スピノザが特に「出エジプト記」に関する聖書の比喩的解釈を通し「改

革派諸派とリベラルなユダヤ教が共に」参加できる「民主政に極めて近い形態としての神権政治 (theocrata)」の可能性を 17 世紀ネーデルラントに提案したと語る。それは多様の共存ということであるが、その根拠を氏はスピノザの存在論の構造に求める。その存在論は汎神論などではなく、「個々物は神の属性を一定の仕方では表現する様態であって」「各々は無限な実体たる神を無限に表現して」或る差別的関係にあるとする。それが神聖政治の共存の基盤なのである。最後に氏はそれとイスラムのタウヒード「一化の原理」に基づく万物の等位・差異・関係的共存を類比づけている。

評者の柴田氏に対する質問は但し「氏は 21 世紀の共生に向けて今聖書をどのように解釈するか」という法外な問いであつたらしく、信仰者の観点から氏はそもそも聖書解釈はしないと答えられた。評者の真意は聖書を神聖な聖典というより文学テキストとして解釈することが、思想的・倫理的・社会学的メッセージの構築にとって今日も有効ではないかということであり、その問題は物語論的アプローチにも深く連動しているのである。

ヨンパルト氏はビトリアの正当戦争論を今日の憲法 9 条をも視野に入れて提題された。評者はビトリアの *Orbis christianus* から *Totus orbis* へ転換する時代に対する認識が、*Orbis christianus* がさらに四分五裂し解体し、さらに *Totus orbis* が、地球化時代から惑星化 (*super orbem*) に転回してゆくという現代の時代認識にとってどのような示唆を披きうるかを深刻に問いたい。

今回の諸提題をふり返って最後に評者の注目する問題点を挙げて意見・謝辞としよう。第一に、藤田、柴田両氏が存在論から多の共存・共同体の成立を考察されたことに感銘をうけた。哲学界自体がそうした発想に注目しない今日ではなおさらのことである。第二に、聖書のテキストの比喩的解釈が教父時代とはまた異なる地平でなされ新しい共同体の地平が拓けてくる点も留意したい。第三は、各提題が今日の解体寸前の惑星やその上の共同体に対し和の方位を示す可能性を秘めていることであり、われわれの思索にとって先駆的発想となった。
